小鳥さえずる湖畔を駆け抜ける

第37回中国山地日野 鵜の池マラソン大会

▲ゴール目指して一歩を踏み出す

6月8日、第37回中国山地日野鵜の池マラソン大会（同実行委員会主催）が開かれました。当日は、曇り空でときおり雨が降るなどの悪天候にもかかわらず、県内外から約350人の選手が参加しました。

コースは、鵜の池湖畔を周回する2・3㌔、4・6㌔、6・9㌔で、木々で小鳥がさえずる中を駆け抜けていきました。

スタート前には、景山享弘大会長が「緑に囲まれた湖畔の中を走るのは大変気持ちがいい。皆さんには日ごろの運動の成果を自分の体力に合わせ、頑張ってほしい」とあいさつ。選手たちは、思い思いに準備運動を済ませ、レースに臨みました。

本大会には、米子松蔭高校陸上部の生徒らも参加し、県内トップレベルの走りをみせたほか、宇田春男さん（黒坂）が昨年に続き最高齢で参加され元気な姿を披露しました。選手たちが元気に走る姿に観客や選手の家族などから、大きな声援が送られていました。

また、会場では地元の団体による恒例の野菜たっぷりみそ汁のサービスや、焼きそば、手芸品・木工品などのバザーが設けられ、選手やその家族らなどでにぎわっていました。

▲根雨スポーツ少年団による選手宣誓

◀二人そろってゴール

▲ゴールまであと少し！

▲バザーも多くの選手らでにぎわう

▲宇田春男さんへ大きな声援

▲米子松蔭高校の生徒らも力走

根雨のまちを再発見

根雨6区自治会の根雨まち歩き

杉本さんの解説に熱心に耳を傾ける

当時の写真に昔を懐かしむ

「自分たちが住んでいるまちをもっと深く知ろう」と、5月24日、根雨6区自治会主催のまち歩きが行われました。

当日は、根雨6区の住民31人が参加し、奥日野ガイド倶楽部の杉本準一さんがガイドを務め、根雨6区の周りを中心に、富籤場跡（とみくじばあと）や川舟の碑（かわぶね）などの史跡や町並みを見て回りました。当時を偲ばせる写真や杉本さんの解説に、住民らは昔を懐かしがったり、時折驚きの声を上げたりしていました。

「ガイドは一から十まで話す必要はない。あとは本人たちが話し出す、それが楽しい。そこから自分も知らなかった話を聞けたりする」と杉本さん。炎天下のなかのまち歩きでしたが、住民らは会話を弾ませながら、小京都と呼ばれた根雨のまちの素晴らしさを再確認していました。

田植え歌に乗せて

下上菅地区田植え・代満（しろみ）て交流会

田植え歌に乗せてテンポよく

地域に伝わる伝統の田植えを通して、若者や都市生活者と地域に暮らす人たちが交流することで、中山間地域の活性化につなげたいと、5月25日、下上菅地区内の水田で、田植え・代満（しろみ）て交流会（自治会ほか主催）が開かれました。

当日は、地元住民のほか町内外からの参加者や学生人材バンクの学生など約50人が参加し、遠くは大阪からの参加者もみられました。上菅地区に伝わる田植え歌を聞きながら、田んぼの両側で引かれるひもに合わせ、苗を丁寧に植えていきました。

田植え後の交流会では、イノシシ肉や山菜料理などが準備され、参加者らは普段味わえない料理に舌鼓を打ちながら交流を楽しみました。

元気に大きくなってね！

保育園児が鮎を放流

大きくなってね！とアユを見送る園児たち

5月16日、黒坂カワコふれあい公園で、ひのっこ保育所の年長児9人が、稚アユの放流（町水産振興連合会主催）を行いました。

はじめに、矢田貝繁明会長（上菅）が「アユはきれいな水にしか住めません。日野川がこれからも魚が住めるよう、いつまでもきれいな状態にしていきましょう」とあいさつ。子どもたちは、元気よく跳ねる稚アユを歓声を上げながら放流していきました。

今回放流された稚アユは約4000匹。子どもたちに見送られながら泳いでいきました。